

〔原著〕 松本歯学 11 : 54~63, 1985

key words : 歯科教育 — 方法論 — 性格検査

歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究
第9報 CPIとYG性格検査の年度的推移(2) 統計的考察

七倉みや子, 氣賀弥生, 松浦寛子, 宮川 崇, 谷内秀寿
坂口賢司, 橋口緯徳

松本歯科大学 衛生学院 (学院長 橋口緯徳 博士)

A Methodological Study on Technical
Aptitude Ability Survey in Dental Education
Nineth Report : Annual changes of CPI and YG character test (2)
A statistical survey

MIYAKO SHICHIKURA, YAYOI KIGA, HIROKO MATSUURA,
TAKASHI MIYAGAWA HIDETOSHI TANIUCHI, KENGI SAKAGUCHI
and HIROYOSHI HASHIGUCHI

*Matsumoto Dental College,
Dental Hygienist and Technician School
(Principal : Dr. H. Hashiguchi)*

Summary

We have compiled the results of both an aptitude and psychological condition test which were taken by the students of Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School for five years.

Using these data, we could find some tendencies and changes of CPI among students from 1980 to 1982.

We have also compared and inspected the tendencies of each year about YG character tests, and skill and technical ability examinations.

We recognize that the students of Dental Hygienist are getting sense of security and developing some sense of self-confidence in their vocation through their professional education for two years.

In the students of Dental Technician Class seemed to become more intellectual and show a sense of adult hood and responsibility in their role.

Meanwhile, the students of Dental Hygienist Class had a sense of judgement and

exactness in their role, and the students of Dental Technician Class got ability of observation and consideration.

It's especially remarkable that some C-type students in the YG character test were recognized developing abilities of technique and skill.

緒 言

技術教育を施す場合、受ける側即ち学生の適応能力を知っている必要性を感じる。そこで我々は適性及び心理状態のテストを毎年行ってそのデータを5年間ストックしてきた。昭和55年度から松本歯科大学衛生学院学生に対するカリフォルニア人格検査(CPI)と技術力・技能試験を実施し、それに加えて昭和56年からは矢田部ギルフォード性格検査(YG性格検査)を行ってきた。その結果CPIについては、各年度とも歯科衛生士科(H) 歯科技工士科(T)共に、全体的に同じ傾向を示し、中でも人間社会生活において最も重要な対人関係、対社会への適応性があるということが判った^{1)~8)}。一方最近の青年の傾向ともいふべき根気がなく、自主性に欠けるのではないかということもそのデータの結果から考えられた⁹⁾。そこで今回は、第8報に引き続きCPIについては、昭和55年度生から57年度生の推移を、またYG性格検査と技術・技能試験についての年度の傾向を詳細に比較検討してみた。そして昭和56・57年度生のCPIとYG性格検査との関係を調べてみた。

方 法

昭和55年度から58年度までの上記のデータを基にして次の様な事柄を調査してみた。

①昭和55年度生から57年度生の歯科衛生士科、歯科技工士科におけるCPI各項目の得点平均と変動係数により、1年次から2年次への人格形成の変化(164例)について比較検討した。

②技術、技能試験をYG性格検査A・B・C・D・E類の5類型別に分類し得点平均を比較してみた。

③昭和56年、57年度生に関して1人の学生のYG性格検査を追跡的にその変化を調査し、学年全体の調査結果を5類型に分類して、各類型の人数を求めた。

④前回に引き続き、CPIとYG性格検査の関連性を求めるため、CPI項目のDo(支配性)とYG

項目のA(支配性)、CPI項目のSy(社交性)とYG項目のS(社会的外向)におけるC. Spearmanの順位相関係数を求めた。

成 績

①CPIの年次の変化については、昭和55年度生歯科衛生士科(H)については、平均(\bar{x})がSo(社会的成熟性)において50.5から52.3点にCm(社会的常識性)が33.0から36.6点に上がり、Fe(女性的傾向)が、51.5から48.5点に下がり、また変動係数(Cv)は、Soが(0.2→0.1)、Cm(0.4→0.3)と小さくなり、Fe(0.1→0.2)と大きくなった(表1)。

昭和55年度歯科技工士科(T)は、 \bar{x} がSa(自己満足感)46.7から48.7点に、Wb(幸福感)32.9から37.5点に、So42.0から46.0点に、Ac(順応的な成就欲求)36.7から38.6点に、Ie(知的能力)37.0から40.0点に、Fe52.9から55.2点と上がり、CvがSa(0.2→0.1)、Wb(0.4→0.3)、So(0.3→0.2)、Ac(0.3→0.2)、Ie(0.3→0.2)、Fe(0.2→0.1)と小さくなった(表2)。

昭和56年度生Hは、 \bar{x} がWb40.2から39.2点に、So53.1から49.6点に、Sc(自己統制力)51.1から48.5点に、To(寛容性)47.1から45.6点に下がり、CvもWb(0.2→0.3)、So(0.1→0.2)、Sc(0.1→0.2)、To(0.1→0.2)と大きくなっている(表1)。

昭和56年度生Tにおいては、 \bar{x} がCs(社会的成就能力)34.4から41.9点に、Ac39.0から41.7点にFe53.7から54.2点に上がり、Cm30.0から28.7点に下がり、CvはCs(0.3→0.2)、Ac(0.2→0.1)、Fe(0.2→0.1)と小さくなり、Cmが(0.3→0.4)と大きくなった(表2)。

昭和57年度Hは \bar{x} がSa44.9から45.4点に上がり、Cvが(0.3→0.2)と小さくなった(表1)。

昭和57年度生Tは、Do35.7から39.3点にWb36.9から41.4点に、Ac39.1から39.7点に上がり、Re(責任感)34.5から32.9点にSc47.1から45.6点に下がり、CvがDo(0.3→0.2)、Wb(0.4

表1：CPIにおける年度別統計的推移（歯科衛生士科）

		Do	Cs	Sy	Sp	Sa	Wb	Re	So	Sc	To	Gi	Cm	Ac	Ai	Ie	Py	Fx	Fe	
55年度生	1年	\bar{x}	38.2	35.3	41.7	41.0	41.4	38.5	40.3	50.5	47.9	44.5	47.9	33.0	38.5	50.2	42.0	41.0	56.0	51.5
		σ	7.6	8.4	10.6	10.0	9.2	7.4	9.0	7.8	8.1	7.4	9.0	12.0	8.5	7.5	6.8	7.7	11.3	7.4
		Cv	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	38.8	37.1	40.9	43.7	43.8	38.5	40.3	52.3	47.8	45.4	46.7	36.6	38.4	50.8	41.4	42.6	57.0	48.5
		σ	8.4	8.3	10.9	8.5	9.8	8.7	8.1	7.4	10.3	8.1	9.9	10.6	8.7	9.0	8.0	8.8	11.5	7.5
		Cv	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
56年度生	1年	\bar{x}	41.2	40.2	42.1	43.5	43.5	40.2	45.8	53.1	51.1	47.1	53.2	35.3	42.2	50.2	42.2	44.8	56.2	50.6
		σ	8.0	10.1	10.4	9.2	10.8	8.9	6.9	7.7	7.5	6.4	9.8	11.2	10.5	7.4	8.7	10.2	10.1	7.8
		Cv	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	40.7	39.0	41.7	45.3	45.2	39.2	43.2	49.6	48.5	45.6	51.3	35.2	40.3	52	41.8	45.2	58.7	48.5
		σ	7.6	8.7	9.9	8.9	10.7	9.8	8.1	9.3	9.8	8.7	10.8	11.4	7.8	8.0	8.7	9.0	9.7	8.8
		Cv	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
57年度生	1年	\bar{x}	38.9	38.3	40.6	44.5	44.9	36.3	39.0	49.8	48.1	45.0	49.0	34.4	39.1	50.7	42.6	46.3	56.9	50.0
		σ	8.8	8.9	11.4	9.5	11.3	11.0	7.7	8.2	11.2	9.2	11.3	10.3	9.6	8.7	6.7	9.3	11.9	8.0
		Cv	0.2	0.2	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	38.1	39.1	41.4	45.6	45.4	37.2	39.1	46.7	46.9	45	47.3	35.3	39.3	52.3	40.3	44.8	57.0	51.8
		σ	9.2	9.4	10.7	10.9	10.9	12.5	8.4	10.4	10.7	9.8	11.8	9.1	9.8	8.3	8.2	8.6	10.6	8.6
		Cv	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2

表2：CPIにおける年度別統計的推移（歯科技工士科）

		Do	Cs	Sy	Sp	Sa	Wb	Re	So	Sc	To	Gi	Cm	Ac	Ai	Ie	Py	Fx	Fe	
55年度生	1年	\bar{x}	38.5	37.6	41.4	44.7	46.7	32.9	36.4	42.0	43.6	42.0	33.8	29.4	36.7	46.0	37.0	47.5	54.1	52.9
		σ	11.0	8.8	10.3	12.7	9.5	13.3	9.9	13.7	8.6	9.2	9.6	12.9	9.7	7.7	10.7	7.7	12.2	8.8
		Cv	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.4	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	40.0	38.9	42.3	48.4	48.7	37.5	35.3	46.0	45.1	45.1	48.3	31.9	38.6	51.6	40.0	48.6	61.3	55.2
		σ	10.6	8.0	9.6	9.6	6.5	11.3	7.2	8.0	9.7	9.5	9.1	12.0	7.1	9.5	9.4	8.3	14.4	7.4
		Cv	0.3	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
56年度生	1年	\bar{x}	37.6	34.4	40.7	40.8	45.1	37.2	40.7	50.1	48.9	44.7	46.9	30.0	39.0	52.2	38.3	48.8	59.4	53.7
		σ	8.9	9.4	13.0	11.9	8.6	12.8	7.5	10.1	7.2	8.5	9.9	10.2	8.9	9.0	10.6	9.0	11.7	8.2
		Cv	0.2	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	42.2	41.9	43.7	47.1	46.4	41.0	39.0	49.7	50.3	50.0	52.7	28.7	41.7	56.0	40.9	52.2	61.7	54.2
		σ	7.6	10.3	12.8	12.9	11.3	13.0	6.8	8.5	9.6	8.9	10.6	12.8	6.0	9.0	10.6	8.2	11.5	7.6
		Cv	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.1	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2
57年度生	1年	\bar{x}	35.7	36.6	42.2	43.6	47.8	36.9	34.8	48.9	47.1	43.7	46.5	33.9	39.1	52.0	39.5	47.9	56.8	55.3
		σ	9.3	8.3	9.8	8.2	6.7	13.3	9.6	10.3	11.1	8.1	12.0	10.6	12.0	8.0	9.9	9.5	10.3	8.3
		Cv	0.3	0.2	0.2	0.2	0.1	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2
	2年	\bar{x}	39.3	40.2	43.8	48.1	48.4	41.4	32.9	49.9	45.6	46.2	48.5	34.8	39.7	49.6	40.9	48.7	54.6	52.3
		σ	8.4	9.2	9.2	8.6	5.2	11.2	12.0	10.3	12.1	8.2	12.4	11.3	9.5	9.0	11.0	9.5	9.8	8.5
		Cv	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3	0.4	0.2	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2

→0.3), Ac (0.3→0.2) と小さくなり, Re (0.3 →0.4), Sc (0.2→0.3) と大きくなった(表2).

②昭和56年から58年の全学生を対象とした YG 性格検査と技術力試験結果の関係をみると, 技術力試験(実測値)については, HでA類(平凡型)の者が1年生 \bar{x} 51.1点2年生55.2点と高い値を示した。Tについては, B類(不安定積極型)の者が1年生で \bar{x} 56.8点, 2年生に67.0点と高い値を

示し, 最も差がみられた(図1, 2)。

技術力試験(全体観)では, HでA類の者の1年生 \bar{x} が39.7点, 2年生50.3点でD類(安定積極型)の者の一年生 \bar{x} が, 35.7点, 2年生48.2点と高い値を示した。TはE類(不安定消極型)が1年生 \bar{x} 54.4点と高い値を示したが, 2年生にはA類82.1点, B類77.3点C類(安定消極型)82.8点, D類81.8点, E類84.0点と各類型ともだいたい同

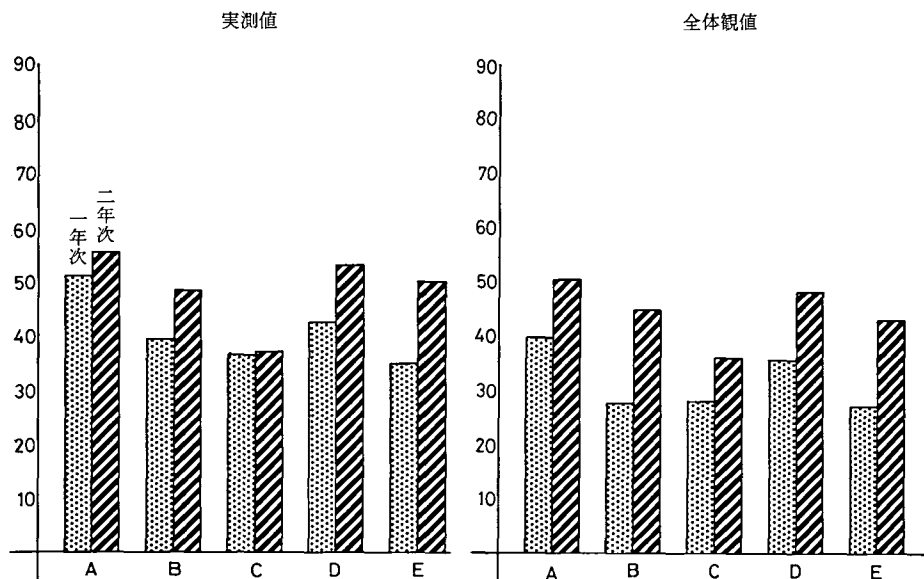


図1：歯科衛生士科の YG 性格検査と技術力における実測値，全体観値

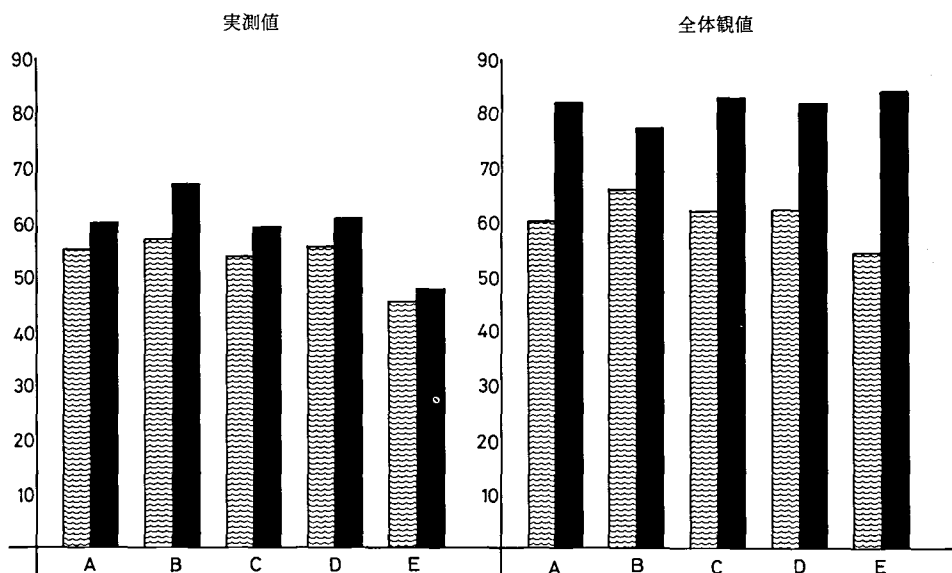


図2：歯科技工士科の YG 性格検査と技術力における実測値，全体観値

じ得点を示した(図1, 2)。 技能力試験(判断力)については、HでA類が1年生 \bar{x} 70.1点, 2年生で75.3点と高い値を示し, 1年次から2年次に顕著に上昇を示したのは、C類の45.2点から68.9点であった。Tは、各類型とも大差はなかった(図3)。

技能試験(作業能力)については、Hは1年生

が \bar{x} 56.2から61.0点, 2年生が62.0から70.6点の間にあり, Tは1年生で, \bar{x} 50.9から56.1点, 2年で54.7から57.3点の間にあり類型による著明な変化はみられなかった(図4)。

技能力試験(正確性)については、Hの1年生 \bar{x} 39.2点から55.3点の間にあり, 2年生は45.2点から61.9点との間にあり, C類の者が1年生 \bar{x} 39.2

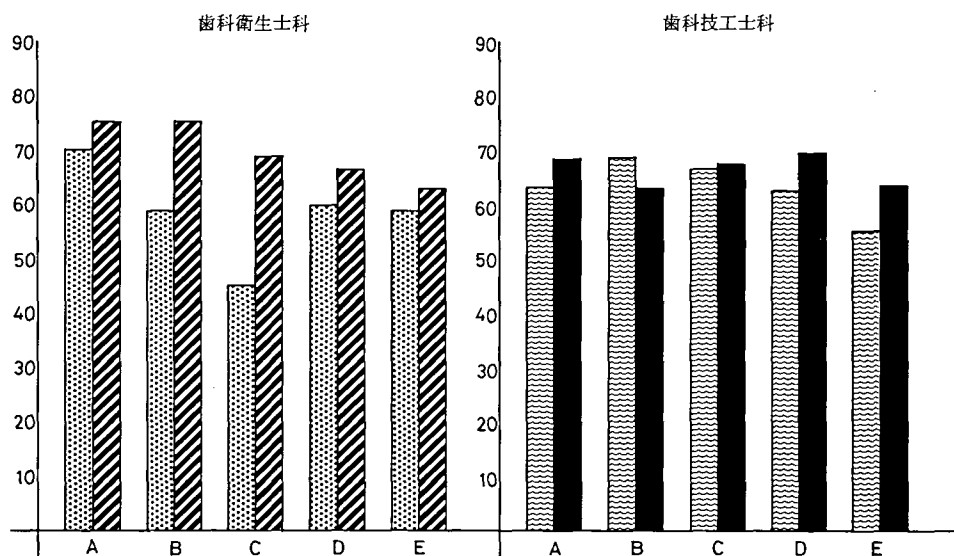


図3：YG 性格検査と技能能力 (1)判断力の推移

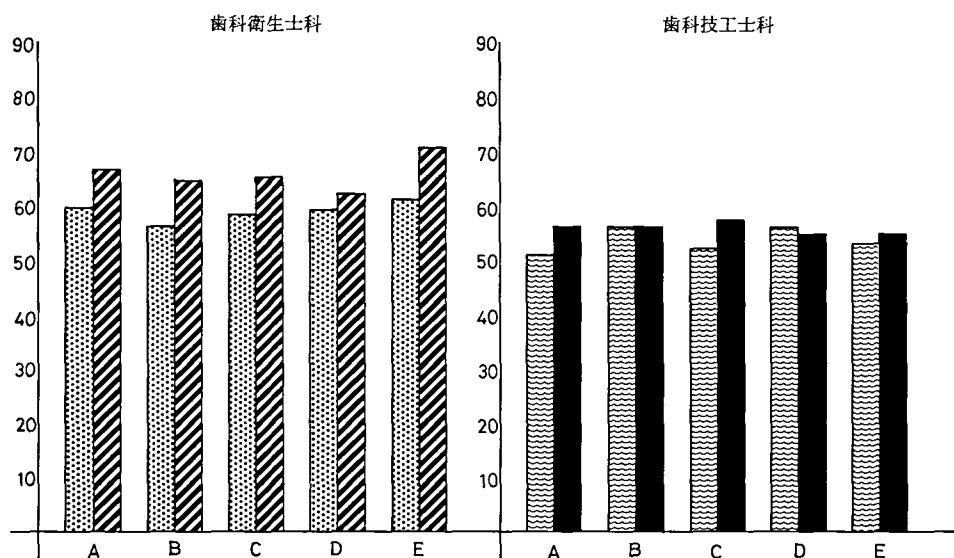


図4：YG 性格検査と技能能力 (2)作業能力の推移

点と低い値を示し、2年生56.7点と大きく上昇した。Tは、1年生、2年生とも差がほとんどみられなかった(図5)。

技能能力試験(観察力)については、Hはあまり差がみとめられず、Tは2年生で \bar{x} A類63.7点、B類61.8点、C類59.5点、D類54.5点、E類45.0点とA、B、C、D、E類型の順に低い値になっ

た(図6)。

技能能力試験(構成力)については、Hについてはあまり差が認められず、TについてはC類が1年生 \bar{x} 50.8点、2年生71.8点と最も差が認められた(図7)。

③ YG 性格検査5類型における年度的移行推移を56年、57年度生で検討した結果、1年次A類

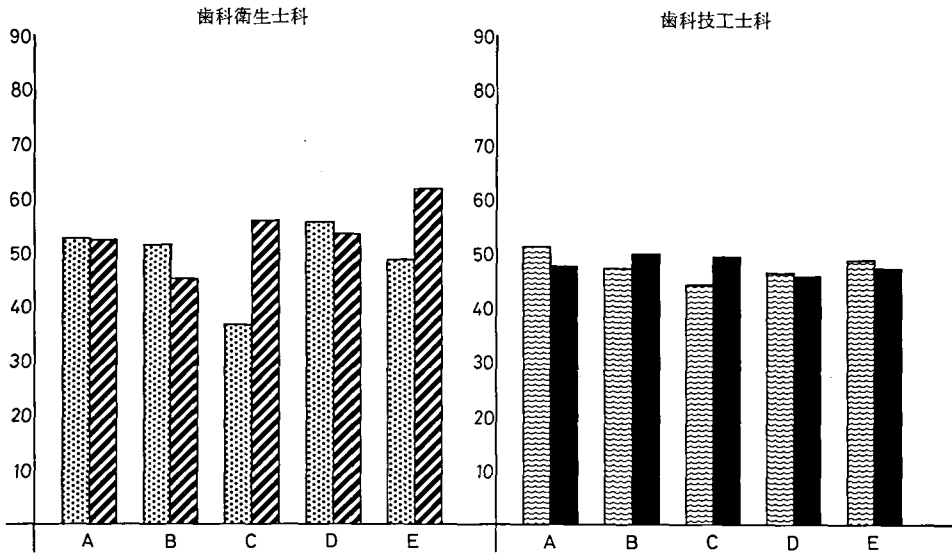


図5：YG 性格検査と技能力 (3)正確性の推移

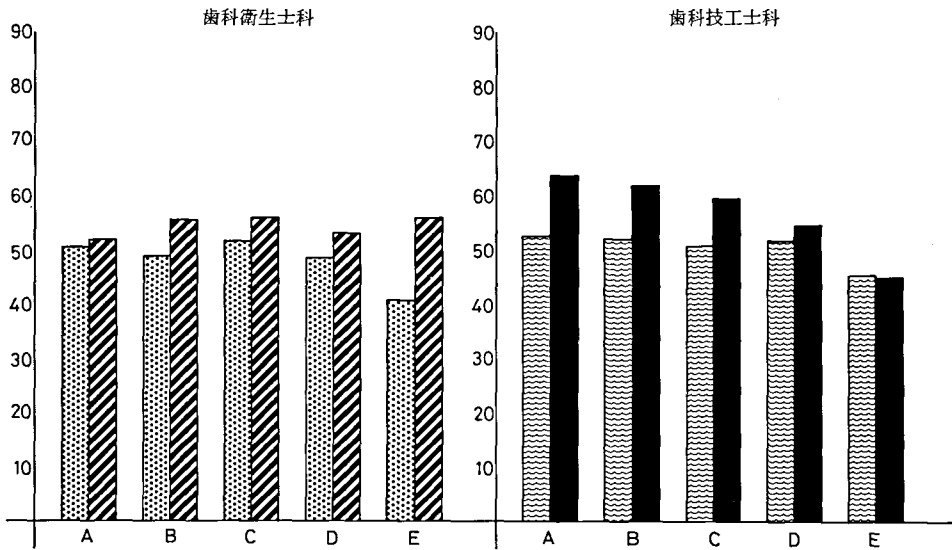


図6：YG 性格検査と技能力 (4)観察力の推移

が30名中2年次に移動しなかったのは、7名で、他はB類7、C類4、D類10、E類2名が移動した。B類は26名中移動しなかったのは16名でA類5、D類4、E類1名が移動した。C類は10名中移動しなかったのは6名でA類2、D類に2名が移動した。D類は53名中39名が移動せず、A類に6、B類3、C類5名が移動した。E類は6名中

4名が移動せずA類1、B類1名の移動を見た(表3)。

④各年度のHとTにおけるCPI項目のDoと、YG性格検査項目のAにおけるの関係をみるとρがHで0.59~0.64、Tで0.43~0.84の間にあった(表4)。

同じようにCPI項目のSyとYG性格検査のSに

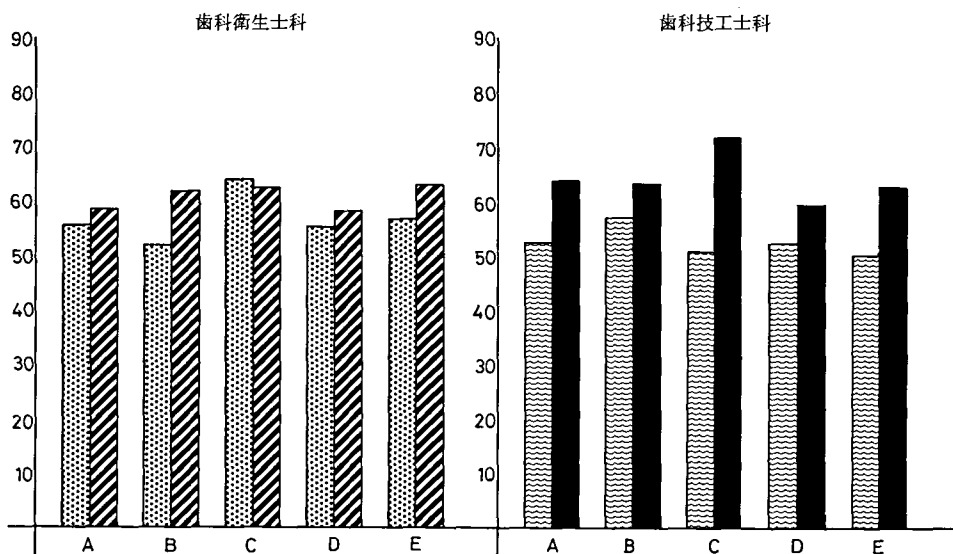


図7：YG 性格検査と技能力 (5)構成力の推移

表3：YG 検査における年次の推移 (S56, 57年度生)

2年次 1年次	A(21)	B(27)	C(15)	D(55)	E(7)
A(30)	7 0.23	7 0.23	4 0.13	10 0.33	2 0.07
B(26)	5 0.19	16 0.62	— 0	4 0.15	1 0.04
C(10)	2 0.20	— 0	6 0.60	2 0.20	— 0
D(53)	6 0.11	3 0.06	5 0.09	39 0.74	— 0
E(6)	1 0.17	1 0.17	— 0	— 0	4 0.67

おいての関係をみると ρ がHで0.67~0.08, Tで0.47~0.86の間にあった(表5)。

考 察

第3報において、技能力や人格と専門的教育訓練との関連は薄いと述べたが³⁾、今回の分析によって次にあげるような事柄が判った。

CPIの55年度生~57年度生を群別にみて、歯科衛生士科の、第1群で56年度生は、社会的成就能力と57年度生の自己満足感において \bar{x} が上がりかつばらつきも小さくなっている。第1群は心的安定感、優越性、自信の程度を測定するものであるので結果的には教育によって多くの学生が、物事

に対する気力が高まり、自己に対する価値を認め、なおかつ自立性も高まっていることが推察される。第2群において55年度生の社会的成熟性、社会的常識性について \bar{x} が上がりばらつきも小さくなっている。また56年度生は社会的成熟性と自己統制力、寛容性について \bar{x} が下がりばらつきも大きくなっている。57年度生についてはあまり変化が認められなかった。第2群は社会化、成熟性、責任感の程度を示すのであるが、2年次に平均が低くなった学生もあることから、人格形成において常に向上するということは言い難く、またこの結果に対する理解も困難である。第3群、第4群についてはあまり変化が認められなかった。

続いて歯科技工士科については第1群で55年度生は自己満足感、幸福感、56年度生で社会的成就能力、57年度生で支配性と幸福感の \bar{x} が上がりばらつきが小さくなっている。第2群では、56年度生で社会的常識性が、57年度生で責任感と自己統制力の \bar{x} が下がりばらつきも大きくなった。第3群については、55, 56, 57年度生とも順応的な成就欲求の \bar{x} が上がり、またばらつきも小さくなっている。これは歯科技工士教育の中で技工実習において責任感や堅実、誠実さが培われるのではないかと考えられる。第4群においては、55, 56年度生について女性的傾向の \bar{x} が上がりばらつきも

表4：CPI項目(Do)とYG項目(A)における順位相関係数(ρ)

各年度におけるクラス	ρ
S56-H ₁	0.59
S56-H ₂	0.62
S57-H ₁	0.64
S58-H ₁	0.61
S56-T ₁	0.70
S56-T ₂	0.43
S57-T ₁	0.74
S58-T ₁	0.84

表5：CPI項目(Sy)とYG項目(S)における順位相関係数(ρ)

各年度におけるクラス	ρ
S56-H ₁	0.72
S56-H ₂	0.72
S57-H ₁	0.67
S58-H ₁	0.80
S56-T ₁	0.60
S56-T ₂	0.58
S57-T ₁	0.47
S58-T ₁	0.86

小さくなっている。すなわち辛抱強さや節度を守ることが向上しているのではないかと考えられる。

YG性格検査と技術力試験においては、どのタイプの者も2年生になると上昇している。特に全体観において歯科技工士科はYG5タイプのすべてに高得点を示し、2年次に上昇している。このことは歯科技工士教育による技術力の効果の結果が現われている事を示している。5タイプ別に見て同様な得点上昇を示すことは、全体観については性格とは関係なく、着実に教育成果が上がっている事を示している。しかしその中でも歯科衛生士科、歯科技工士科共にE類においての伸びが著しく現われたことは、E類は不安定消極型という点から性格の悪い面が内攻するタイプであり、健康的な範囲ではエンジニアタイプであると考えられることから本実験を通して如実に現われている。

YG性格検査と技能力においては、判断力についてみると歯科衛生士科のC類が1年、2年の間に大きな差を示した。この型は情緒的安定、社会的適応、消極的内向性で簡単に言えばおとなしいタイプである。良い面をとり上げれば安定した落ち着いたタイプであるが判断力にすぐれていることが本実験ではうかがわれた。本実験の歯科技工士科については、1年から2年に少しの上昇変化が認められたが、全体的にあまり変化を示さなかった。正確性は歯科衛生士科に変化が見られ、観察力には歯科衛生士科、歯科技工士科共に変化が認

められ上昇傾向を示した。即ち教育により歯科衛生士科は正確性を、歯科技工士科は観察力が培われたのではないと思われる。

全体を通してみると歯科衛生士科、歯科技工士科ともC類安定消極型の者が各項目とも得点の上昇があった。この類型のものは2年間の教育において特に技能力の向上がみられたものと考えられる。

前回のデータに加えてYG性格検査を行った結果から考察すると、5タイプにおける年度の推移をみた場合、前回同様A類に属した者の他類への移動が目立った。このA類は、性格特性について、平均的な性格特性を示し、平凡なタイプであるということより良く示した。D類は他類型にほとんど2年次に移動をみなかったが、このことは、D類が情緒的、社会的に調和的で適応的、安定的行動をとるタイプであること等でこのデータからしてもうらづけられる。

人間の心理状態は、環境あるいは体調その他多くのファクターによって変動すると思われる。そこで1つのテストで決めつけるのではなく、できれば多くのテストをもとにして考える必要がある。そこでCPIとYG性格検査の類似した項目を第8報と同じくピックアップして順位相関係数を求めたところ、CPI項目(Do)とYG項目(A)との関係、CPI項目(Sy)とYG項目(S)のそれぞれの順位相関係数をみると、実験成績にも示すごとく、かなりの相関を示した。しかし、いく

らかの変化があったことを鑑み同一人物の性格検査をおしはかる場合2つ以上のテストを施すべきである。

総 括

松本歯科大学衛生学院学生を対象に5年間のカリフォルニア人格検査と矢田部ギルフォード性格検査のストックされたデータについて統計的に観察した結果、次の様なことが判明した。

① CPIの年度の推移の成績は、歯科衛生士科は2年次に第1群が上がり、歯科技工士科は第1, 2, 3, 4群とも上がった。各項目では第2群において上がった項目と下った項目があったが、歯科衛生士科に比べ、歯科技工士科の方が、全体的に性格の安定上昇が見られた。

② CPIにおいて平均を求め標準偏差を算出し、変動係数を求めたところ、歯科衛生士科については、1群(心的安定感、優越感、自信の程度)において、変動係数が小さくなったのは、56年度生のWbと57年度生のSaであった。2群(社会化、成熟性、責任感の程度)においては、55年度生のSoにおいて、またCmにおいて変動係数が小さくなり、逆に変動係数が大きくなったものは、56年度生のScとToであった。第3群(成就能力と知的能力の程度)、第4群(知的な型および興味様式)については変動がみられなかった。歯科技工士科について変動係数が小さくなったのは、第1群において55年度生のSa, Wb, 56年度生のCs, 57年度生のDo, Wb, であった。第2群においては、55年度生のSoの変動係数が小さくなり、逆に56年度生のCm, 57年度生のRe, Scが大きくなった。第3群においては、55, 56, 57年度生共にAcにおいて変動係数が小さくなった。第4群においては55年度生, 56年度生共にFeにおいて変動係数が小さくなっていることが判った。

③ YG 5類型における技術・技能力試験との年度の推移を見ると、技術力において実測値は歯科衛生士科の方が歯科技工士科に比べ高度の成長が見られた。しかし、得点は歯科衛生士科より歯科技工士科の方が高得点を示した。また全体観においては歯科技工士科の方が歯科衛生士科に比較し、全体的に極めて高い得点を示し、年度の推移も高率を示した。

④ YG 5類型と技能力の関係は、判断力、作業

力において歯科衛生士科、歯科技工士科共全体的に高得点を示し、年度の推移は歯科衛生士科において、極めて少ないが上昇傾向があった。正確性、観察力は全体的に低得点であったが、正確性については歯科衛生士科、観察力については歯科技工士科が年度の推移の上昇を見た。構成力においては年度の推移は、歯科技工士科において顕著な上昇を認めた。

⑤ YG 性格検査の5類型を更に細かく分析すると、年度の推移は技術力の実測値において、歯科衛生士科のE類に、歯科衛生士・技工士科のD類に上昇が認められ、全体観では歯科衛生士科のB・E類、歯科技工士科のA, B, C, D類共に顕著な上昇を示した。

⑥ YG と技能力試験の中で、各類型別にまとめてみると判断力において歯科衛生士科のC類、作業力において歯科衛生士科のE類、正確性について歯科衛生士科でC類、観察力において歯科技工士科でA, B, C類、歯科衛生士科でE類に顕著な上昇が認められた。

⑦ YG 性格検査 5 類型における年度の移動推移についてまとめると、1年次A類のものが2年次も同じ様にA類に属しているのは、30名のうち7名であり他の23名は他類へ分散されていた。それに反し、D類は2年次に移動をみなかったのは、39名で最も多く他類型への移動は、少なかった。

⑧ CPI と YG 性格検査との比較においてまとめると、CPI 項目 (Do) と YG 検査項目 (A) において歯科衛生士科で0.59~0.61とかなりの相関が認められ、歯科技工士科で0.43のかなりの相関、0.70~0.84の高い相関が認められた。

⑨ CPI 項目 (Sy) と YG 検査項目 (S) において歯科衛生士科0.67のかなりの相関、0.72, 0.80の高い相関が認められ、歯科技工士科0.47~0.60のかなりの相関、0.80の高い相関が認められた。

ま と め

以上の事柄から、歯科衛生士科の2年間の学院の教育により、心的安定感が出来、優越感と自信がいくらか芽ばえて来たものと思われる。歯科技工士科は社会的に成熟性と仕事に対する責任感が持て、知的になり、仕事に対する興味が持てる様になったといえる。また、仕事に対する判断力、正確性は歯科衛生士科に、観察力、構成力は歯科

技工士科において培われた事が判り、特に YG 性格検査の C 類の者に技術力、技能力共顕著な進歩が見られた。

参 考 文 献

- 1) 橋口緯徳, 谷内秀寿, 坂口賢司 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 1 報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術力, 技能力について. 日歯技工誌, 2(1): 45-51.
- 2) 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 橋口緯徳 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 2 報 松本歯科大学衛生学院生徒の人格検査. 松本歯学, 7: 95-103.
- 3) 谷内秀寿, 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 3 報松本歯科大学衛生学院生徒の技術能力と人格検査との比較. 松本歯学, 7: 104-110.
- 4) 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 4 報 技能力の経年的観察(1). 日歯技工誌, 3(1): 68-73.
- 5) 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 5 報松本歯科大学衛生学院生徒の CPI 年度的推移と YG 性格検査について. 松本歯学, 8: 63-69.
- 6) 谷内秀寿, 丸山寛子, 宮川 崇, 坂口賢司, 橋口緯徳, (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 6 報 技術, 技能力, 人格検査および専門教育学力との比較. 松本歯学, 8: 70-76.
- 7) 谷内秀寿, 宮川 崇, 坂口賢司, 橋口緯徳(1984) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 7 報 技術能力と一般適性検査の比較. 日歯技工誌, 5(1): 113-118.
- 8) 小林美樹, 清水みや子, 丸山寛子, 宮川 崇, 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1983) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第 8 報 CPI と YG 性格検査の年度的推移(1). 松本歯学, 9: 38-46.
- 9) Gough, H. (1956) California Psychological Inventory. Consulting Psychologists Press, California.
- 10) 我妻 洋, 川口茂雄, 白倉憲二 (1980) カリフォルニア人格検査 (CPI)・実施手引. 3 版. 誠信書房, 東京.
- 11) 辻岡美延 (1965) 新性格検査法・YG 性格検査実施応用研究手引, 日本・心理テスト研究所, 大阪.
- 12) 安藤公平, 大村政男, 花沢成一, 佐藤 誠(1982) 心理検査の理論と実際. 改訂版. 駿河台出版社, 東京.
- 13) 辰野千寿 (1963) 心理学 (系統看護学講座 29). 医学書院, 東京.
- 14) 肥田野直, 瀬谷正敏, 大川信明 (1979) 心理教育統計学. 培風館, 東京.
- 15) 大平他 (1976) 現代心理学—行動の科学—. 建帛社, 東京.
- 16) 岡田芳子 (1958) 歯科実技叢書 衛生統計学. 医歯薬出版, 東京
- 17) 岡本栄一他 (1983) ころの世界. 新曜社, 東京.
- 18) 田中恒男 (1975) 新・統計のまとめ方つかい方. 医歯薬出版, 東京.